

●二人で味わう古典和歌(43)

をみなへし口もさが野にたつた今僧正さんが落なさんした

四方赤良

『万載狂歌集』「秋」の一首。

狂歌は、ひびなり夷曲・えびす歌・俳諧歌・へなぶりとも呼ばれる、当意即妙の諧諷や滑稽を楽しむ和歌。広くは『万葉集』の戯笑歌や『古今集』の俳諧歌までさかのぼるかと思

われるが、盛んになったのは江戸時代。とりわけ江戸後期には、よものあから四方赤良、あべら朱楽菅江らを中心に、軽妙洒脱な天明狂歌が大流行した。『万載狂歌集』はこの二人の編による。三河万歳と、勅撰和歌集の一つである『千載集』をかけたというから、タイトルまでふざけている。

右の歌、詞書は「女郎花」。そして本歌はこの歌。

名にめでて折れるばかりぞ女郎花われ落ちにきと人に
語るな
僧正遍照『古今集』

「おみなえし」といういい名前に感じ入って、手折つてみただけなのだよ。おみなえしよ、私が女性に近づいて墮落

したなどと、人に言っではいけないよ」。

若干言いつがましい気分を滲ませながら、この花の名を生かした、遍照の才気溢れる一首と言おうか。

ならばと、狂歌作者もまた腕を振るつた。「をみなへし口もさが野に」と、舞台は女郎花の咲く嵯峨野へ。そして、口さがない(噂の好きな)遊里の女たちを登場させ、「落ちにき」を落馬へ転換した。

「口さがない遊里の女たちが、あらあら今、僧正さんが落馬されたわと噂している」。

遊女言葉の「落なさんした」が、場面もリズムも生かしておもしろい。落馬の理由は、おおかた女郎花(美しい女)に見とれたんだろ……。そんなニュアンスが、本歌の言い訳がましさと、まことによく合う。

遍照は六歌仙の一人であるが、その歌について、「歌のさまは得たれども、まことすくなし。たとへば絵にかける女を見て、いたづらに心を動かすが如し」(『古今集』「仮名序」と評されているのも、なんだかおかしく思い出されてしまう。

(小島ゆかり)

